☆年間第25主日(9月20日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（イザヤの預言　５５章６節～９節）

主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。
呼び求めよ、近くにいますうちに。
神に逆らう者はその道を離れ
悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。
わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してくださる。
わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり
わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。
天が地を高く超えているようにわたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙 1 章 20～24,27 節）

　皆さん、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然と
あがめられるようにと切に願い、希望しています。
わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。
けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶ
べきか、わたしには分かりません。
　この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、
キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。
だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。
ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。

福音朗読　（マタイよる福音書　２０章　１～１６節）

「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。

主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

幾分か涼しくなってきました。いかがお過ごしですか。コロナの感染者もまだまだ多い状況ですが、対処法もある程度わかってきたようですので、厳しく心配せずとも、落ち着いて感染予防法を実践しましょう。菊地大司教

様はお知らせで、75歳以上の方へのミサ参加の自粛要請を解除されましたが、引き続き十分注意した中での参加を願っておられます。今日の日曜日は「敬老の日」の祝福があります。おめでとうございます。神様から恵まれた長寿を感謝しましょう。そして、この感謝の気持ちを遠くの肉親の方にも電話などで、「おめでとう」と伝えましょう。
さて今日の朗読は「神と人間の思いは異なる」が主題になっています。

第一朗読　（イザヤの預言　５５章６節～９節）

私たちは自分に都合の良いように物事を考えがちです。そしてその考えが一番良いものと思って行動したりします。もちろん自分で考えて行動することは大事ですが、自分の考えがすべてではないことを知ることも大事です。特に他人に対する判断は要注意です。感情が高ぶっているときにはことさら注意すべきでしょう。「神の思いは人間と異なる」は実は、「神の思いは私たちの思いをはるかに超えている」なのです。違うのではなく、はるかに高く超えているのです。そしてそれは私たち人間のためであるのです。

第二朗読（使徒パウロのフィリピの教会への手紙１章 20～24,27）

このフィリピへの手紙はローマ皇帝の裁きを受けるために牢屋にいる時に書かれた手紙だといわれています。ですから身柄を拘束されており、決して自由な状態ではなかった時ですが、手紙の内容は重く苦しいものではなく、ある意味では喜びに満ちているといえるでしょう。パウロはもう思う存分主イエスのために働いたから、一刻も早く主のもとに行きたいと望んでいます。しかしながら、このまま生き続け、生まれたての教会のために働き続けることも大事だと思っているのです。パウロの時代の教会はまだユダヤ教的な考えが強く働いており、パウロにとっては気の抜けない時期であったのです。ですからまだまだ働き続けなければならないと考えていたのです。
パウロがキリスト・イエスのために捕らえられたということこそが、キリストを伝える大きな力になっていました。一見不自由な暮らしのように見えますが、その不自由な暮らしこそがイエスのために働くエネルギーを与えていたのです。私たちも今は確かにキリストの福音を伝えるためには不自由ではありますが、そこにこそ宣教のエネルギー、宣教の力を見出すことが大事なのだ

といえます

福音朗読　（マタイよる福音書　２０章　１～１６節）

この福音の個所のすぐ前には、「先にいる多くのものが後になり、後にいる者が先になる」と書かれています。その言葉についてのたとえ話のようになっています。このたとえ話を聞いた現代人は、きっと違和感を覚えるでしょう。労働環境、契約環境の点からみればすぐにも労働基準監督署のお役人さんが訪れてきそうです。「いついつまでの是正してください」と。確かに違和感があります。でもここで言われていることは労働環境でも、契約についてでもないのです。神の国への神の招待の時期についてなのです。神は人間を一人残らず神の国に招待されますが、その招待状が発送される時期はまちまちなのです。でたらめというわけではありません。その人にとって一番ふさわしい時期に神は呼び掛けられるのです。第一朗読のイザヤの預言では「私の思いはあなたたちの思いとは異なる。あなたたちの思いを超えている」と言われています。ですから不公平でも何でもないのです。

以前、小平にいたときに俗にいう「天国ドロボー」に出会いました。ずっとずっとやくざな生活をしていた人です。その人の家にお邪魔したことがありますが、部屋に日本刀がしっかりと飾ってありました。「そうかー、天国ドロボーかあ」と思いました。でも、そんな目で見てはいけなかったのですね。夕方５時に農園の主人はこの人を見つけたのだと思います。

「なぜ何もせずに一日中ここに立っているのか」

「誰も声をかけてくれず、雇ってくれないからです」

そう、私たちが声をかけていなかったのです。だから、神はしびれを切らして、その「天国ドロボー」を私のところに連れてこられたのだと思いました。その人はしばらくして洗礼を受け、亡くなりました。

今年の教会の行事はほとんどが中止になっています。信徒の皆さんが集まっての行事はできないのですが、それはもしかしたら、集まっての宣教ではなく、教会から出て、派遣される形での個々人の活動、イニシャチブに

期待されているのではないでしょうか。個人としての宣教の工夫が願われているのでしょう。今日、思い切って「お隣さん」に声をかけてみましょう。「いかがお過ごしですかー」と。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光